

Linux Kernel 2.6 の IPv6 プロトコル・スタック 詳解

xinetd の daytime-udp を利用する udpv6_rcv 関数の処理 赤松 徹

第
4
回

受信した自局宛での IPv6 パケットを第 3 層から第 4 層に処理を依頼するとき、tcp の場合は tcp_v6_rcv 関数、udp の場合は udpv6_rcv 関数、icmp の場合は icmpv6_rcv 関数へ分岐することを第 2 回目で解説した。今回は icmpv6_rcv 関数を紹介したので、今回は udpv6_rcv 関数に焦点を当てて解説する。
(筆者)

daytime-udp 設定ファイルの修正

簡単な IPv6 の UDP クライアント・プログラム(リスト1)を作成して、xinetd 内に含まれる daytime-udp(13 番ポート)へサービス要求パケットを発信しました。そのパケットをカーネル内部の udpv6_rcv() 関数がどのように処理するかを確認します。最初に xinetd が IPv6 パケットを処理できるように、

リスト1 IPv6 の UDP クライアント・プログラム IPv6_UDP.c

```
#include <stdio.h>
#include <string.h>
#include <sys/socket.h>
#include <sys/types.h>
#include <netinet/in.h>
#include <netdb.h>

int main(){
    struct sockaddr_in6 to_addr;
    socklen_t slen;
    struct hostent *to;
    char mess_from[1500], mess[]="UDP_daytime IPv6";
    int so, con, ies, len=sizeof(mess);

    so=socket(AF_INET6, SOCK_DGRAM, 0);
    if(so<0){
        printf("Cannot open socket\n");
        exit(1);
    }
    bzero((char *)&to_addr, sizeof(to_addr));
    to_addr.sin6_family=AF_INET6;
    to_addr.sin6_port=htons(13);
    to_addr.sin6_addr=in6addr_loopback;
    slen=sizeof(to_addr);
    if(sendto(so, mess, sizeof(mess), 0, (struct sockaddr *)&to_addr, slen)<0){
        printf("Error sendto %s daytime_server\n", to->h_name);
        close(so);
        exit(1);
    }
    recvfrom(so, mess_from, 1500, 0, (struct sockaddr *)&to_addr, &slen);
    ies=strlen(mess_from)-5;
    mess_from[ies]='\0';
    printf("Message:%s\n", mess_from);
    system("date ¥"+¥Y ¥m ¥d ¥H:¥M:¥S¥¥");
    close(so);
}
```

/etc/xinetd.d/daytime-udp 設定ファイルを修正します。修正点は次の 2 か所です。

```
disable = no      動作を有効にする
flags = IPv6      IPv6 パケットを処理する
```

リスト2 に示す修正を行った後、xinetd をリスタートします。IPv6 の UDP ソケットが動作していることを、/proc/net/udp6 ファイルの内容を表示して確認します(図1)。

```
# /etc/rc.d/init.d/xinetd restart
Stopping xinetd:  [ OK ]
Starting xinetd:  [ OK ]
```

wrapper によるアクセス制限

xinetd を configure したときに wrapper ライブラリを組み込んだかを、次の ldd コマンドで確認します。

```
# ldd /usr/sbin/xinetd | grep wrap
libwrap.so.0 => /usr/lib64/libwrap.so.0
(0x00002aaaaaabd000)
```

libwrap ライブラリの表示があれば組み込まれています。その場合、動作確認できるようにアクセス制限の設定を解除する必要があります。/etc/hosts.deny ですべてのアクセスを拒

リスト2 /etc/xinetd.d/daytime-udp 設定ファイルの内容

```
service daytime
{
    disable      = no
    flags        = IPv6
    type        = INTERNAL UNLISTED
    id          = daytime-dgram
    socket_type = dgram
    protocol    = udp
    user        = root
    wait        = yes
    port        = 13
}
```

```
s1 local_address remote_address st tx_queue rx_queue tr tm->when retrnsmt uid timeout inode
13: 00000000:000D 00000000:0000 07 00000000:00000000 00:00000000 00000000 0 0 4665 2 ffff81007975fc00
```

図1 /proc/net/udp6 ファイルの内容



```

・サービス要求パケット
T.Akamatsu ipq_packet_msg_t m->data_len=65
60000000
00191140 ペイロード長: 0x019=25 オクテット, 次ヘッダ: 0x11=17 (UDP)、HOP_LIMIT: 0x40
00000000000000000000000000000001 始点アドレス ::1
00000000000000000000000000000001 終点アドレス ::1
[ペイロード]
8003000D 始点ポート: 0x8003, 終点ポート: 0x0D=13 (daytime)
00196E1E 長さ: 0x19=25 オクテット, チェックサム=0x6E1E
5544505F64617974696D652049507636 送信メッセージ: UDP_daytime IPv6
00

・時刻返信パケット
T.Akamatsu ipq_packet_msg_t m->data_len=74
60000000
00221140 ペイロード長: 0x022=34 オクテット, 次ヘッダ: 0x11=17 (UDP), HOP_LIMIT: 0x40
00000000000000000000000000000001 始点アドレス ::1
00000000000000000000000000000001 終点アドレス ::1
[ペイロード]
000D8003 始点ポート: 0x0D=13 (daytime), 終点ポート: 0x8003
002216BB 長さ: 0x22=34 オクテット, チェックサム=0x61BB
3038204D415920323030362031353A33 返信メッセージ: 08 MAY 2006 15:3
313A3331204A53540D0A 1:31 JST

```

図2 daytime-udp パケット情報

否しているならば、クライアント・プログラムを実行したときに、`/var/log/messages` ログに拒否したメッセージが記録されます。

```
xinetd[1713]: libwrap refused connection to
daytime-dgram (libwrap=daytime) from ::1
```

そこで、`/etc/hosts.allow` ファイルに`::1`からの daytime 接続要求のパケットを許可する行を追加します。IPv6 アドレスの前後を `[]` で囲むことを忘れてはいけません。これ以外にも `ip6tables` などでパケット・フィルタリングを設定している場合は、適切に許可して実験できる環境にします。

```
daytime:      [::1]/128
```

実行の確認

IPv6 アドレス`::1`の13番ポート(`daytime`)へUDPパケットで接続要求するプログラム(リスト1)を確認します。ここで、IPv4とIPv6の両方とも処理するプログラムにしなかったのは、IPv6パケットのみ発信して確認したかったからです。

また、IPv6のローカル・ホスト(`::1`)からパケットを送受信するので、発信パケットに「`UDP_daytime IPv6`」のメッセージを付加することにしました。コンパイルして実行すると、次に示すように、受信したパケット内容と現在の時刻情報を表示します。

```
# /SOFT/MyProgram/UDP/a.out
Message:08 MAY 2006 15:31:31 JST
2006 05 08 15:31:31
```

アプリケーション層の表示結果だけでは、カーネル内部の処理を確実に読み取ることはできません。そこで `ip6tables` の `QUEUE` ターゲットを使用して、IPv6パケットをユーザ領域に

```
struct udphdr {
    __u16  source;
    __u16  dest;
    __u16  len;
    __u16  check;
};
```

source	dest
len	check

図3 UDPヘッダ定義とヘッダ構造図

取得しました。図2に示す daytime-udp パケット情報の重要ポイントは次の7点です。

ペイロード長: IPv6ヘッダ長を含まない

次ヘッダ: 17はペイロード上にはUDP情報を運んでいる

HOP_LIMIT: 0x40の値は`/proc/sys/net/ipv6/conf/default/hop_limit`に定義してある

UDPヘッダの始点ポート: サービスを要求する側は未使用のUDPポートを探して利用する

UDPヘッダの終点ポート: サービスする側は13番ポート(`daytime`)

UDPヘッダ上のlen: (UDPヘッダ+メッセージ)長

UDPヘッダの後に第7層に渡すメッセージが続く

次ヘッダがUDPなので、ペイロード上の先頭には`include/linux/udp.h`ファイルで定義したUDPヘッダ(図3)が設定されています。UDPヘッダ定義を構造図に示すと、パケット情報との関連が理解しやすくなります。

udp6_rcv 関数の処理内容

それでは`net/ipv6/udp.c`ファイルの450行目以降に書かれている`udp6_rcv()`関数(リスト3)の処理内容を確認しましょう。

459行目の`pskb_may_pull()`関数は、`skb`に保管している未処理データ長がUDPヘッダ以上の長さがあるかを確認する